

第6章

東日本大震災を語り継ぐ

- | | |
|----------------|-----------------|
| 6-1 職員の対応と取り組み | (1) 地震・津波災害への対応 |
| | (2) 原子力災害への対応 |
| 6-2 その時市民は | (1) 酪農家 ST さん |
| | (2) I さん夫婦 |
| | (3) 小高区 ST さん |
| | (4) S さん夫婦 |



小高区浦尻地区の様子

6-1 職員の対応と取り組み

東日本大震災によって、本市職員は、地震・津波災害への対応に加え、原子力災害への対応という誰もが未体験の状況において、対応を求められた。震災当時、それぞれの現場において対応した経緯を、地震・津波災害対策、原子力災害対策について、現場の声を取りまとめた。

(1) 地震・津波災害への対応

- ・ 情報収集手段が確保できず、情報の収集、情報の伝達双方の対応に苦慮した。避難所だけでなく、区庁舎、災害対策本部でさえ、被害状況の把握が困難であった。情報を求める市民に対して、的確な情報提供ができなかった。市職員間の情報共有もできず、各持ち場で孤立した状態となった。非常時の通信手段（対 県・国を含む）の確保が最優先事項である。
- ・ 一次避難所の備蓄や防寒対策が不十分だった。震災当時は民間企業との連絡がつかず災害協定が機能しなかった事実も踏まえ、最悪の事態を想定した備蓄や防寒対策を考慮すべき。
- ・ 現地確認だけでなく職員や委託業者の安全管理についても考慮していくべき。
- ・ 発災より2週間程度経過し、状況が安定してくると、通常業務と震災対応を並行して実施する場が生じる。震災により新たな業務が多く発生、情報の収集・共有や指示系統が確立できず、組織や人員体制が十分に機能しない状況も起こった。このような状況を考慮した、緊急的な人員配置計画、指揮・情報伝達方法についても検討、準備しておく必要がある。

(2) 原子力災害への対応

- ・ 原子力防災計画がない中で原子力災害への対応であったため、放射能に対する知識も線量計もなく、どのように対応すれば良いのか判断に苦慮した。
- ・ 原子力発電所の事故に関する情報は、テレビやラジオの情報しかなく、情報の錯綜による混乱もあり、情報を求める市民への情報提供に苦慮した。
- ・ 市民の安全確保が第一のため、行政対応を担保したうえで、職員の安全確保の方法、必要な対策を検討、準備しておく必要がある。
- ・ 情報の伝達では、屋内退避状況の場合、防災無線や広報車による広報では屋内にいると聞こえないとの声もあった。原子力災害特有の状況を踏まえた情報伝達方法の検討、計画が必要である。
- ・ 原子力災害による、大規模な市民の移動に対する広域の避難先・移動手段の確保が課題となる。自治体や民間企業等と事前に協定を締結しておくことが重要である。
- ・ 市民の安全確保だけでなく、職員や委託業者の安全確保についても考慮が必要である。
- ・ 原子力災害に関連した業務が多数発生（環境放射線モニタリング、除染作業等）し、通常業務、地震・津波被害対応の業務と三つ巴となり、市職員の人員が不足し、職員の負担増加や業務への対応が困難な状況となった。
- ・ 緊急的な人員確保に対して、平時より他の自治体との協定や、民間事業者との協力関係の構築を行う必要がある。
- ・ 放射能や放射能汚染に対する知識、対策など専門的知識を有する人材が不足していた。平時より、各種専門家とのネットワーク構築や、定期的な知識習得の場を設けておくことが重要である。

6-2 その時市民は

大地震と大津波、それに続く福島第一原発の事故。このいくつも重なり深刻で過酷な状況を生み出した大災害に、南相馬市民は翻弄され続けている。

この記録誌は、記録を残すことに意味があるということに重点を置き、できるだけ客観的なデータを積み重ねた。しかし、地震の回数、被害者数、被害面積、放射線量等さまざまな数値や事実、その先に市民一人ひとりがあることを忘れてはならない。「南相馬市民」という一括された塊ではなく、6万人を超える一人ひとりそれぞれの被害、それぞれのストーリー、それぞれの思いがある。

ここでは、そのごく一握りではあるが、市民の話を聞き、あの日、その後の日々、感じたこと、抱える思いの一部を採録した。

- (1) 酪農家 ST さん
- (2) 小高区 I さん夫婦
- (3) 小高区 ST さん
- (4) 飲食店経営 S さん夫婦

(1) 酪農家 ST さん

小高区小屋木在住（福島第一原発から直線距離で約 15km）

震災前は酪農を営む

家族は両親と妻、子供 2 人

3月14日の福島第一原発事故を受けて避難開始、福島市内の県立高校の避難所に約1か月、その後の二次避難は南会津へ。平成24年の4月には原町の応急仮設住宅に入居した。

■ガソリン不足のなか、福島市へ避難

地震の当日は、子どもの小学校の入学準備があつて、浪江町で買い物をしていました。

地震が起こったときは浪江の郵便局の近くで車に乗っていて、タイヤがパンクしたのかと勘違いするような揺れを体験しました。その後車を止めたときに揺れが大きくなって、横にあった建物が倒壊するし、液状化現象も起きていました。

これは大変な地震が起こった、早く家へ行かなくてはと、細い駐車スペースを通過して道路に出ました。浪江町から自宅のある小高区小屋木まで、国道6号を使おうとしましたが、それは直感的に無理だろうと思ったので、旧国道を選びました。地震のせいで道路に60~100cmの段差が生じていたところもあり、普段なら15分で行けるのに、倍の30分ほどもかかったと記憶しています。

家に着いてすぐに牛舎を確認すると、パイプなどが破損していました。家の中は物が落ちていた程度で、お湯は使えませんでした。電気は通っていて、水も井戸なので問題なかったです。携帯



は多少つながっていました。防災無線は全然なくて、被害の状況や原発のことは夜になってもまったくわかりませんでした。

消防団員なので、3月12日の朝、酪農の仕事が終わってから11時ぐらいに小高の消防署へ行きました。小高区岡田から線路をまわって行く途中、小高いところ（右図中※）から見たら、海原みたいに光って見えたのを憶えています。

消防署に到着したころには消防団の仕事は何もなくて、ご遺体に毛布を掛けるくらい。その日の午後、消防団解散後にガソリンを調達に行きましたが、どこにもありませんでした。原町まで行くと灯油はあったので、ポリタンク6缶分買いましたが、その後避難した福島市でもガソリンを買うのは難しかったです。

3月14日の11時ころ、牛に水を与えるためのウォーターカップを修理していた時、爆発音が聞こえました。12日の夜に、妻と子どもたちだけ妻の実家に避難させて、両親と私の3人は小高に残ろうということになりましたが、結局、私と妻と子どもたち、そして原町区の義理の母との5人で飯館村に向かいました。原発は南にあって、北のほうには頼れるような知人もいないし、国道が壊れているという情報も入っていたし、もともと子どもが病気で通っていた病院が福島市内にあるので、そちらへ向かうことにしたのです。このときガソリンが半分くらいしかなくて、一度行ったら小高区までは戻れないと判断して、14日の夜は飯館で車中泊しました。

15日になって両親から避難する旨の連絡を受けたので、夕方に飯館村で合流してから、病院に近い中学校へ向かいました。到着してみると、市立中学なので短期滞在の福島市民優先だと言われ、赤十字の方の誘導に従って21時過ぎに県立高校の避難所へ向かいました。



■両親にも子どもにもストレスが大きかった避難所生活

県立高校に到着したら、すでに30人くらいいたのでしょうか。避難してきた人たちは南相馬だけでなく、多方面からだったようです。トイレを流すにはプールの水を使いました。食料は遠方から届けられた賞味期限切れのパンだったり、ボロボロのおにぎりだったり。下の子は当時生後8か月で離乳食が必要だったのですが、おにぎりのボロボロのご飯を指でこねて与えようとしてもなかなか食べてくれませんでした。

毛布は配給されましたが、床は板だったので、1週間くらい経ってから段ボールを敷きました。ずっと一軒家で暮らしてきた両親にとっても、プライバシーがほとんどない避難所生活は相当なストレスとなっていたと思います。

その県立高校には1か月ぐらい滞在しました。小学校1年の上の子は、ふだんはわがままなど言わないのですが、避難所生活のストレスからかと思いますが、「早く帰りたい、こんなところにはたくない」と言っていました。ただ、県立高校の生徒さんたちがボランティアで避難所の子どもたちと遊んでくれたおかげでストレスは和らいだようです。

避難所では近くにある、わたり病院の看護師さんたちが炊き出しをして、温かいものを食べられるようになりました。でも、避難所はもともと生活する場ではなく一時的な場所なので、汁物は飲みきるように言われていて、カップラーメンなどそのときは食べないものも出されましたが、両親には「もらえるときにもらっておけ」と言われました。子どもをお風呂に入れてやることができたのは1週間

後です。避難所から徒歩 15 分程のところにある銭湯が震災発生 10 日目に再開したので、夕方連れていきました。

■避難後の酪農の状況

乳牛は毎日絞らないと病気になってしまいます。牛を放して外を動き回られても被害が生じるので、牛舎に入れたままにして避難しました。しかし、犬猫の保護を目的に現地に入った動物愛護団体のボランティアが、乳牛も餓死していたらかわいそうと、牛舎から出してしまいました。エサもすべてばらまかれてしまい、1 基 60 万円の配合飼料タンク 3 基分の損害です。牧草のロールもそのままであれば 1 年は保管可能なものも、鎌で傷だらけにされました。牛はそんな状態の草は食べません。

また、夏には配合飼料が雨水等で流されて排水溝に詰まってしまう、大きな水たまりができて、50m ぐらい手前から羽音が聞こえるほどの大量のハエが発生しました。

当事者としては実に迷惑なことで、他の酪農家も同様の状態となっていました。

生き残った牛 18 頭は、その年の 9 月に殺処分されました。殺処分は国の対応が遅かったので、南相馬市の判断で実施されました。

■南会津町での二次避難生活

避難していた県立高校でも入学式が迫って、4 月に避難所が閉鎖されることになり、南相馬市から指定された南会津町に行くしかないと決断しました。両親が先に移動して、私たちは 1 週間くらい遅れて行きました。

南会津町にはペンションはあちこちにあって、そこに避難者が分散して入居しました。子どもの学校のこともあって、転入手続きをしました。ペンションには家財道具はありませんでしたが、手持ちの衣服は持って行きました。4 月 22 日の警戒区域で小高に入れなくなるまでに、身の回りのものや財産、通帳など、ある程度のはもち出せてはいましたから。

南会津町には仕事はあまりありませんでしたが、館岩での募集が 4 月終わりにあって、小高区の方ばかり 5~6 人が手を挙げました。原町区の方はいずれ帰れるだろうという見込みがあったから、その時は仕事を得ようとはしなかったのだと思います。6 月 1 日から 10 月下旬までの間、館岩森林組合で働きました。

上の子は移動の度に学校が変わりました。避難先の福島市の小学校、転入先の南会津町の小学校、平成 24 年の 4 月からは原町区の小学校に転入しました。

南会津のペンションでは、震災後 2 か月ほどは原発事故の影響やその風評被害があって、一般客が来なくなっていました。自分がいたペンションには 11 人（原町区 5 人、小高区 6 人）の避難者がいました。ほかのところも 1 軒あたり 6~7 人くらいでしょうか。県から避難者 1 人受け入れると 5,000 円の補助金が出ていました。時間が経って一般客が戻ってくると、他の同様の避難者が出ていかざるを得なくなり、原町の方々は私たちより早く、7 月下旬に帰って行きました。

■応急仮設住宅での生活開始

仮設住宅は、4 次、5 次の募集になってもなかなか当たりませんでした。

当時の館岩での仕事は 12 月で契約が切れるので、冬になったら出稼ぎに行くか南相馬へ戻るかの決断が必要でした。結局 11 月からは原町で仕事をすることになり、私だけ先に南相馬に戻りましたが、車が 4 輪駆動ではなかったため、雪の多い南会津と行き来することはできず、3~4 か月は家族には会えませんでした。妻と子どもたちは、上の子の学校の始まりに合わせて 4 月に戻ってきて、今は原町区の仮設に住んでいます。

両親は南会津町のあと、「仮設には暮らせない」ということで、宮城県に家を買ってそちらで暮らしています。

■南相馬で暮らすということ

南相馬で暮らすことのメリットは、知り合いがいる、コミュニティがあるということです。県外に避難した人は、知り合いがいなかったり、県民性が違うから困ったりした人もあると聞きます。

小高に帰るにあたってのいちばんの障害は、放射線です。うちの近所のだいたい半径1kmくらいの人たちは、山側で放射線量も高めなので、みな帰らないと言っています。除染して放射線量を下げただけじゃなく、これまでの損失をある程度補償してもらわないと困ります。もともと100坪あったのに30坪になったら納得はいかないですよ。

東京電力の賠償についても、東京電力に責任があると国がはっきり言わないじゃないですか。そういうところをはっきりさせておかないと、ほかの電力会社にも影響しますよ。補償金は誰も納得できる額ではありません。裁判になると東電側は優秀な弁護士を立てるでしょうから、こちらが負けるのは目に見えています。国の仲裁センターもあるし、自分たちで弁護士も立てていますが、私たちは一人あたり1万円ずつ負担しているし、勝訴してもさらに費用がかかってしまう。

原発事故は収束したとされていますが、収束なんかしていない、何も終わっていないんです。

他県で中学生が自殺したニュースがあったときに、友人の子どもははじめがあったと言っていました。福島県民というだけで差別されることだってあるんです。そんな差別を受けないように、しっかりした対応が必要です。県境に有刺鉄線を張り巡らして「福島県人は出入禁止」としてくれた方がよっぽど楽だろうと思うこともあります。

南相馬市は、福島県の中ではへき地です。福島県の人口は中通りに集中しています。県の行政も福島郡山のある中通りばかりを見ていると思います。ボランティアが来るといっても国が収束宣言を出してからのことだし、有名人で来る人たちはみんな偽善者だと思ってしまうようになりました。政治活動や売名行為に利用する人にも来てほしくない。住民票をこちらに移してまで本当にボランティアで活動されていた方もいるけれど、そういう人はごくわずかです。

将来の南相馬を思うと、この先20年くらいはとてつもない厳しい。帰るのは年寄ばかりで、若い人たちは帰らないのではないかと危惧しています。

(2) 小高区Iさん夫婦

小高区桃内在住
2世帯住宅に会社員の息子家族（妻、孫）と合わせて5人で暮らしていた
家を新築し、入居築2年目に震災が発生。富山市へ避難した後、夫婦は原町区の仮設住宅へ、息子家族はいわき市の仮設住宅へ入居。

■震災後の避難の経緯

- 3月11日 発災日夜は自宅待機
- 3月12日 1号機水素爆発後、自主避難を開始
福島市を目指して移動、福島市の土湯街道沿いのコンビニで車中泊
- 3月13日 福島市の自衛隊駐屯地近くにある「西学習センター」で宿泊
- 3月15日 上越市まで移動し市内のビジネスホテルで2泊滞在
- 3月16日 富山市まで移動し県庁へ相談に行く
- 3月17日 富山市野外教育活動センターを紹介され、3月29日まで滞在
- 3月29日 富山市内の団地に入居、11月までの約7か月間滞在
- 11月15日 原町区の仮設住宅の説明会にて桜井町への入居が可能となり、現在に至る

■発災当日

発災当日は、私と妻と息子の3人が自宅にいて、建築会社が築2年目の自宅の保守点検をしていました。点検は午前中で終わる予定でしたが13時過ぎまでかかり、その後私は山仕事に行きました。

地震発生時は山がすごく揺れて、近くの太い木にしがみつきました。妻と息子は家の点検が終わり、自宅にいましたが、息子は薪ストーブが前後左右に大きく揺れ、室内の煙突が外れて火災になるのではないかと思ったそうです。また、妻も息子から早く家の外に出るように言われ、玄関まで出たものの揺れの大きさに身動きできず、玄関脇の柱や庭の榎の木にしがみついていたとのことでした。当時8歳の孫は小学校、嫁は仕事（原町区）で家にはいませんでした。

私は山から帰ってきてすぐ、妻と息子の無事を確認し、小学校に孫を迎えに行きました。小学校に着くと、校庭に子どもたちが上履きのまま避難していました。子どもたちは、親御さんが迎えに来た人から順に帰っていきました。学校で10分くらい話をして帰りましたが、このときは、まだ、津波は来ていませんでした。（津波は小学校近くまで迫ったが、学校は浸水していない）

自宅は、水道水は出ませんが、井戸があり、電気も問題なく利用できましたので生活には不自由しませんでした。

震災情報は、テレビから得ることができ、息子から「仙台空港が津波の被害を受けた」と聞いていたので、近くの高台に向かい海の方を見たら、行津・浦尻方面の田んぼがすべて湖みたいになっていて、びっくりしました。夕方には、嫁も職場から戻り家族全員の無事が確認できました。

双葉郡の地域では避難していたようでしたが、3月11日は避難せず、自宅にいました。ピンときていなかったです。

■自主避難開始、福島市、上越市へ

12日の朝になると、テレビの情報や地区の連絡員から、原発の避難範囲が10kmに拡大したことや、自宅が原発から約11km地点であることがわかりました。嫁は、「私たちも避難した方がいい」と言っていました。息子は「避難する必要はない」と言い、避難はしませんでした。ただ、嫁が非常に心配していたので、万が一に備えて、車（家には車が4台ありましたが、燃料の残量が多かった車2台）に避難時の荷物を積んでおくことにしました。

午前中は、近所の子の落ちた瓦の片づけを隣組の方々としました。その後、私は息子と自宅の屋根に上がって瓦が落ちたり、割れたりした箇所シートをかけたりしていました。屋近くなると、双葉町（原発から約3km）で酪農をしている兄の家族が避難してきました。冷たいおむすびを持っていたので、温かいものを食べてもらおうとご飯を炊きましたが、少ししか口にしませんでした。相変わらずテレビでは、原発に関するニュースが放映されていました。ちょうど、家の外に出ているとき、「ドスン」と物凄い音が浪江方向から聞こえました（12日15時36分の水素爆発）。私が「原発が爆発したんじゃないか？」と言うと、息子は不安そうな顔をしたものの「原発は爆発しない」と言いました。

しばらくして、テレビから原発1号機の爆発映像が映し出され、それを見た息子が「すぐに車で避難するぞ。荷物は全部積んであるか！」と言い、双葉町から避難してきた兄の家族とも別れ、避難することにしました。自主避難です。後から、息子に聞きましたが、爆発の映像を見て風が北西（自宅方向）に流れているのが気になったとのことでした。

自主避難として宛もなく北方面に車を走らせました。途中、道路の陥没や地割れの影響と思われるバリケードや標識により、何度も迂回し原町区に着いたとき、息子と相談し、私の姉と妹が住んでいる福島市に原町・川俣線で向かいました。しばらくして、車のラジオから、避難範囲が20km圏内に拡大されたことを知りました。自主避難から強制避難に変わったのです。川俣町の通過は、車載カーナビが町内の狭い道路の通過を表示していたので、その指示通りに走ったため川俣町で渋滞には遭い

ませんでした。しかし、車窓から見えた左側の国道 114 号は大型バスなどで渋滞（停電？）していたようで、福島方向へ動いている車の姿はありませんでした。

私たちは、渋滞もなくスムーズに福島に来ることができ、国道 4 号沿いのレストランに入りましたが、ほとんどのメニューの食材がなく、「雑炊しかできない」とのことでしたが、少し休みたかったこともあり、注文することにしました。私たち家族が店に入ったころは、混んでいなかったのですが、食事が出来上がるころには、避難してきた人たちで店内がいっぱいになりました。その人たちから「(原町・川俣線の) 矢木沢峠が混んでいる」といった情報を聞きました。避難の判断が少し遅ければ、福島市へ避難することが出来なかったのではないかと思います。

食事も済み、福島市内の妹の家に着き、お邪魔して家に入りましたが、停電で電化製品は使えず、石油ストーブで灯りと暖をとっていました。この状態では、家族全員がお世話になるのも失礼と思い、この日の夜は、国道沿いのコンビニエンスストアの駐車場で車中泊となり、雪も散らつき、とても寒く寂しい不安な夜でした。

翌 13 日の朝は、避難を始めてからお風呂に入っていなかったため、土湯温泉に向かったのですが、温泉施設が壊れていたため温泉には入れませんでした。国道 115 号線（土湯街道）の脇にある「西学習センター」で飲料水の配布をしていた消防団の方に、嫁が避難所の話をしたところ、「少し待っていなさい」と言って担当者を呼んで来てくれました。私には、よく知りませんでした、「福島市の指定避難所ではないので本来は受入れ出来ないが、数日でしたらどうぞ」と言って頂きました。取り次いで頂いた消防団の方に、息子夫婦が深く頭を下げていました。案内されたところは、大きさテニスコート 1 面程度のホールだったと記憶していますが、暖房設備もありました。嫁は、他の避難してきていた女性の人たちと炊出しを手伝ったりしていました。夜になると、福島西 IC から多くの他県ナンバーの消防レスキュー車両がサイレンを鳴らして走っていく光景を見て感動しました。

翌 14 日の昼前に息子から「3 号機も爆発した。ここ（福島市）も危なくなるかもしれないので、日本海の方へ行け、石川県まで行け。俺は仕事で会社に戻ることになる。」と言い、息子と別れ、車 1 台に私、妻、嫁、孫の 4 人で、新潟までは一般道を走り、新潟からは北陸自動車道を利用して上越市まで行き、夕方ごろビジネスホテルに入りました。

16 日には、嫁が知人や親戚との連絡の中で、富山県が避難者の受入れを表明していると聞き、富山県に避難することにしました。

■富山市での避難生活

上越市のビジネスホテルに 2 泊した後、嫁が富山県庁の担当窓口へ相談に行くと、既に他の避難者もいて、住むところを話していたようです。はじめはスキー場のバンガローみたいなところを紹介されましたが、とても住めるような環境ではなかったので、富山市山田のスキー場のそばにある「野外教育活動センター」に入ることになりました。当時センター付近はすごい残雪がありました。コテージ風の建物が数棟建っており、1 棟 50 人ぐらいは泊まれる造りでセンター本館には 24 時間使用できる温泉がありました。電気と燃料は自由に使わせてもらったので、お米と釜を買い、自分たちで食事を用意しました。野外教育活動センターには、17 日から 29 日までの期間お世話になり、滞在中の 27 日には、息子も休暇を利用して富山市へ来ました。原発で作業に従事したと言い、髪の毛は短く丸坊頭になっていましたが、元気な姿を見て安心したことを覚えています。

その後、嫁が市役所と連絡を取り、富山市内に入居可能な 4 階建ての団地が見つかりましたが、エレベーターが設置されていなかったため、足が不自由な妻は悩んだみたいでしたが、せっかく落ち着いて生活できる場所が見つかったのだからと入居することにしました。入居に合わせるように近くの電気屋さんを中心とする地元の方々から、中古ではありましたが、生活用品から食器棚、布団、洗濯機やテレビなど、いろいろ頂きました。4 階まですべて運んで頂いて非常に助かりました。この団地

には、3月29日から11月末までお世話になりましたが、他にも浜通りからの避難家族が2家族いました。敷地に隣接してお店が並ぶ大きな団地で、面倒見のいい方たちがたくさんいるところでした。

息子の仕事は震災の影響で不規則な勤務となりましたが、休暇を利用して毎週2日程度、また嫁も職場の都合から平日は南相馬で働き、週末は富山に帰ってくるという、浜通りと富山の往復生活を福島に戻る11月までしていました。孫は、4月から富山市の小学校にお世話になり、団地から集団登校をし、知らない土地や学校に戸惑い、最初は泣きながら通学していました。しかし、すぐに団地に住む同じクラスの子とも仲良くなり、富山弁が自然に口から出るようになりました。その子とは今でも親友で、電話で連絡を取り、年に1~2回遊びに行っているようです。

富山での生活にも慣れ始めたころ、避難していた人々が福島県内に戻り、生活を始めたとの手紙や連絡が来るようになりました。このころから、北陸での冬の生活を考えるようになり、冬前には福島に戻りたいと思うようになりました。私たちが富山で生活している間は、息子夫婦が南相馬市役所と連絡を取っていたようです。

当初、私たち夫婦に鹿島区内の仮設住宅が当たったのですが、避難家族全員(6人)で住めるような広さではありませんでしたし、嫁の母親と孫の2人を置いていくこともできず、このときは入居を見送りました。その後、嫁の母親が富岡町(いわき市)の仮設住宅が借りられることになり、息子と嫁、孫、嫁の母親の4人が10月21日に入居したので、妻と2人きりの寂しい生活を少し送ることになりました。

11月10日は、一時帰宅で南相馬市役所に立ち寄り、仮設住宅の申込みについて問い合わせましたが、「わからない」との返事ががっかりしました。しかし、その日の夜に息子から「市役所から仮設住宅への入居決定の連絡がきた」と電話があり、大変嬉しかったのを覚えています。直接、市役所の窓口で担当者と話が出来たことが要因ではなかったかと思っています。

11月15日には、原町区内の仮設住宅の入居説明会があり、その日のうちに鍵を渡されましたが、布団など何もなかったので寝ることもできず、息子が17~18日にかけて富山から荷物を取ってきてくれました。引越しの手続きは、息子に任せ、26日に富山市の団地の戻り、日用品は車に全て詰め込み、富山最後の夜を市内のホテルで過ごし、翌日、富山市をあとにしました。富山県や富山市、そして団地と近所の方々には大変お世話になりました。

■津波の言い伝えなどなかった小高

小高の自宅に帰る都度、畑のイノシシ被害の凄さ、薪ストーブ用の薪が地震の影響ですべてひっくり返し風雨によって腐り、自宅脇の小屋には、13年間、毎年炭釜で焼いたたくさんの炭が、放射能で使うことができない悔しい気持ちでいっぱいです。

地震が起こった後、海の方でものすごい雷が鳴りました。これまで、津波に遭ったこともなく、津波についての言い伝えのようなものも聞いたことがありません。津波といわれてもピンとこないのです。だから、まさか、自分の地域がこうなるとも思いもしませんでした。

原町区の仮設に落ち着きましたが、息子夫婦と孫がおらず、私と妻の2人だけなので、情けなくやるせないです。

今は小高に戻っても病院もお店もお隣さんもないので生活していけません。けれども、小高へは、私と妻は戻る気でいます。私たちは小さな農家だから、そこで畑仕事でもできればいいと思っています。

(3) 小高区 ST さん

小高区在住

震災当日から6月の仮設住宅入居までの間に、避難所や親族宅、民間アパートなど、7か所を移動。比較的早く仮設住宅に入居できたものの、短期間での移動は大きなストレスとなった。

■転々とさせられた避難生活

3月11日はまず、小高コミュニティーセンターに避難しました。その後、原発が危ないとのことで、小高中学校の体育館に移動し、一晩過ごしました。防災無線は停電のためか、まったく聞こえませんでした。

12日の夜、損壊の激しい国道6号を避け、旧国道を利用して石神第二小学校に21時ころに到着しましたが、体育館がまだあいておらず、1時間以上車中で待ちました。その後、消防隊が到着してから、体育館に毛布を敷き詰めて雑魚寝しました。食事は、おにぎり2つとお茶の配給がありました。

13日の朝、野馬追の里の会館に移動しました。そこには40人程度の避難者がいました。そこには2泊して、15日の正午ごろに甥の家（三原）にお世話になることになり、移動しました。そこで1か月ほどを過ごしました。その後、福島市内の妹夫婦のところへ10日間世話になりました。

4月16日からは福島市内にアパートが手配できたので、そこで暮らしました。6月13日に小高地区への一時立入りが可能になったと聞いたので、市に問い合わせた際に、仮設住宅に入れるとの話をいただき、6月15日に鍵を取りに行きました。

■震災で感じたこと

移動も多かったし、とにかく、精神的に参った。食事ものを通りませんでした。

市から原町クリーンセンターに震災で壊れた家財等を処分するから早急に外に出してくれと指示され、それに従って、家財を外に出しましたが、「小高のもの」ということだけでそのまま放置され、片づけてもらえませんでした。

うちの周辺地域には27~28軒ありますが、半数は小高へは戻らないと言っています。

(4) 飲食店経営 S さん夫婦

夫（45歳）、妻（36歳）

子ども 男児7歳、6歳、3歳（震災当時 5歳、4歳、1歳）

原町区大木戸在住（震災前後で変わりなし）

南相馬市で飲食店を経営。昭和49年にSさんの父が創業、昭和61年に法人化し、現在は南相馬市に1店舗、いわき市に2店舗、宮城県利府町に1店舗を構える。震災後は全店舗で一時休業したが、4月中旬には再開した。震災前は7店舗で120人ほどのスタッフを抱えていたが、現在は50人程度に減少。現時点でめざしているのは「従前に戻すこと」。労働力を確保し、終日営業ができるようにすることがとりあえずの目標。

■上越市への避難とお店の営業再開（妻）

地震発生時は店にいました。子どもを3人も保育園に預けていたので、迎えに行きました。スタッフもいたので、すぐに避難ということはしませんでした。家はタンスが倒れたりした程度。当日、電気ガス水道は全部止まりましたが、避難所へは行きませんでした。店のほうは、機械が倒れたり食材ロスが出たりといった被害がありました。放射能についてどうなんだろうなあと思いつつも、スタッフもいたし、ガソリンもなかったので、市外へは避難しませんでした。

1週間後くらいに心配した親戚が声をかけてくれて、上越市にある遠縁の家に行きました。一旦は家族全員で避難しましたが、上越市と南相馬を行き来していた夫は、1か月程で南相馬に戻りました。親戚とはいえ血のつながりのない方との同居でお互い気を遣いましたし、子どもは小さくて騒いだりするので、迷惑はかけられないなと思いました。上越市役所で相談して、5月に借り上げ住宅（市営住宅）に移りました。子どもたちはすぐに公立の保育園に入れましたが、あちらで落ち着いて暮らすとは決められませんでした。

4月中旬にお店の営業を再開させましたが、スタッフが避難していて人出が足りず、日帰りや1泊程度で頻りに南相馬へ戻っていました。市内では早めの時期に再開できたのは、周りからの声が大きかったです。社長からの後押しの声も大きかったですね。

雪の多い環境での生活や、往復雪道の運転への不安もあって、12月に南相馬へ戻りました。

新潟は大きな地震を経験していることもあって、近所の方々や保育園の先生方や父兄の方々など皆親切で、何かに困ったということはありませんでした。

子どもはそれなりに順応していましたけど、長男が小学校に上がるというタイミングもあって、南相馬へ戻ることにしました。

今は学区外の小学校へ通わせているので、朝晩送迎しています。昨年までは校庭使用に制限がありましたが、今年からは普通に使えるようです。お母さん方の中には心配する人もいるようですが、うちは子どもが男の子ということもあり、除染さえしっかりしてくれていれば、外で思いきり遊ばせてあげるほうが子どものためではないかと考えています。

ガイガーカウンターは持っていますが、逐一測るほど神経質にはしていません。子どもたちはガラスバッジを付けているけれど、線量がどの程度で病気になるとかならないとか、そういうことまではわからないから、それが示す数値については信用していません。病気はしてほしくないけれども、あれもこれもと制限はしたくないと思っています。

何が起きるかわからないので、現在も上越市の借り上げ住宅はそのままにしてあるんですが、そろそろいいんじゃないかと大家さんから連絡がくるようになりました。

南相馬から移住した人もいますが、その人に大丈夫だよ、とは言えないし、各ご家庭でそれぞれの事情があります。そういうこともあって、スタッフが減ってしまいました。

■2年たっても何も進んでいない（夫）

うちの店は再開は早かったんですが、人手不足のまま、個人の賠償の様子をにらみつつ営業していたのが震災後1年くらいでしょうか。賠償が終われば戻ってくるかと期待していたんですが、従前の状態にはなかなか戻らないという気がしているのが、丸2年経った今の気持ちです。飲食店だけでなく、町に活気はあっても、人手不足の状況は変わりありません。福島第一原発から20~30km圏という範囲だけでなく、人が太平洋沿いから内陸へ移動してしまっているんです。

地元を根を張っている会社はうちだけでなく、どこに向かってがんばればいいのか見えない状態が続いています。人を増やしてラクをしたいというのではなく、「従前の状態」に戻したいんです。うちは飲食店なので「美味しい料理を食べていただいてお客様に喜んでいただく」ということで生活してきました。お金の問題ではなく、以前の状態に戻したいという気持ちでがんばっていますが、平行線のまま今に至っています。現在は近辺の飲食店などの様子見をしている状態です。資本のある大手は時給を上げるなどして労働力を確保していますが、地元の企業ではそのやり方は厳しい。

こっちに戻って働いてもらいたいという気持ちはありますが、若い人に「大丈夫」と積極的には言えません。若い人たちには小さいお子さんがいることが多いので、将来的なことを考えると、この先の見えない状況の南相馬に戻っておいでとは言いにくい。

お店をやっているとお客様から「おいしかったよ」と言葉をかけていただけていますが、一方で、全国的にはいろいろなメディアが福島県の食べ物は食べるなどと言いますよね。私たちは口にすることで商

売しているので、ちぐはぐな感じがしています。当然、食材の産地は確認しているし、以前よりも神経を使っています。食材の産地については、特に小さいお子様連れのお客様から聞かれることもあるので、きちんとお客様に説明できるようにしています。

どの経営者も同じだと思いますが、「暮らしていける」と思ったら、仕事をしなければならない。だから、今までやってきたことをやり続けなければならないという使命感でやっているんだと思います。しかし、そこに「子どもの命」の問題が関わると、うまく答えられません。野原で遊ばせてあげばよかった年頃の子どもを、放射能の心配のない場所へ連れていかなければ、遊ばせられないという状況がありますから。

放射能は事故発生当時から心配でしたが、仲間の動きを見ていると、大丈夫と思う前に目の前の仕事をもとに戻さなければならないということが先立ってしまう。お客様から店を開けてくれという声もいただいたし、50km 圏外のいわき市ではスタッフから再開させてくれという声があがりました。いわき市の店は震災から 10 日くらいで営業再開して、その流れもあって南相馬のこの店も、残っているスタッフとで再開させようと思えました。

スタッフのご家族やスタッフが流された、亡くなった、住まいが無くなった人もいますので、「よかった」とは言えないですし、言ったことはありません。

当社の社長は震災当時相馬市の病院に入院していて、現場の状況がわからないながらも「早く開ける」と言っていました。営業再開にあたっては、社長からの後押しも大きかったと思います。

いわき店のスタッフは南相馬が置かれた状況がわからなかったと、あとから聞きました。いわき店はライフラインが止まって厳しい状況だったし、食材ロスも出しました。復旧したぞと思ったら余震でまた電気が止まって営業できないということの繰り返し。いわきの 2 店舗のうち 1 店はフランチャイズで、宅配業者が入ってこないという状態もあって、食材が入手できず右往左往しました。

スタッフが揃って「全店終日営業」という従前の状態に戻したい一心です。スタッフが足りなくても、お客様は来て下さる。客数の少ないアイドルタイムは閉じざるを得ません。しかしコストはかかるから…という循環が生じますが、コスト削減ではなく、売上げを増やそうという考えで進もうとしています。震災以前は、1、5、8 月の繁忙期や閑散期がありました。ファミリー客も減っています。ただ、震災後 3 回目のゴールデンウィークの感じからすると、かなり戻ってきているようです。他で避難生活をしていても、南相馬に戻ってきた時に当店を利用していただけののは有り難いことです。

働いているから偉いとか働いていないからダメというわけではありません。知り合いでも生活が大きく変わった人もいます。100km 先に行くにもガソリン代が出ないと言っていた人が、ひょいと海外旅行に行ってしまうとか。まちなかで大きな温度差が生じているのを実感しています。

■南相馬をどう思っているか

(妻) すごく好きだなと思ったことはないけれど、嫌いでもなかったです。でも知らない土地に避難して、すごく帰りたくなる。だから、ああ、やっぱり好きなんだなと思いました。何か遊べるところがあるとか、いいところがあるかという、特になくて、海があって山があってというくらいしかないけど、結局戻ってきたいと思って帰ってきています。

(夫) 今はジレンマです。気兼ねなくそこに行けないという状況があって、好きだけど帰れないという。東京に住んで仕事をしていたこともあります。なんで地元が好きかと言われても、それは無条件で、もう好きとか嫌いとかではありません。やっぱり好きなんだろうね。そうでなかったら、今回の震災は最大のチャンスとも言えたんです。危ないから出ていけといわれたんだから、出て行くきっかけになったかもしれません。ただ、こんな非力な人間でもなんとかしようと思ったんです。自然に、変なふうを考えずに戻ってきた。別の地で何か新しいことをしようという気持ちもなかった。なんとかしなきゃまずいなという気持ちが強かったし、お客さまに囲まれてやってきました。体裁のいいことは言えないです、本当に自然な流れで今のようにしています。